

第五章 終 結

一、博士の還曆祝賀

博士の門下生諸氏還曆祝賀の舉に着手す

出資者の資格を限る

大正十年十一月二十九日、此の日芽出度く華甲の齡に達する博士のために門下の有志は相計つて、京都帝國大學教授たる大藤高彦、大井清一兩博士を總代に推し、委員を選びて田邊博士還曆祝賀資金募集の舉に着手のことに決した。而して此の計畫の一度社會に發表せらるゝや、博士の學風を欣慕し、博士の人格を憬仰する人々は、争つて志を寄せ、此の舉の盛大ならむことを期した。然も發起者は其の資格を博士の授業を受けし者に限り、唯僅に博士と二三舊誼ある人の申込を止むなく例外として受くるに止めたが、其の結果、恩師のために慶賀の意を表する門下生の數のみにて九百名を超え、出資金額壹萬圓以上を算し、人をして昭代の一大美事たるを感せしめた。

博士固辭して受けす

これよりさき、委員は博士を訪ひ、此の舉に對する博士の内意を聽いたのであるが、博士は固辭して承諾するの色はなかつた。故に委員は最初募集せる資金によつ

祝賀資金
の大部分
を獎學費
に寄附す

て、博士に祝賀紀念品を贈呈せむとするの計畫なりしを全然變更し、其の資金を公
共事業に使用するとの條件を附し、漸く博士をして納得せしめたのである。依つ
て委員は、前記出資總額を、擧げて京都帝國大學に對し獎學資金として寄附し、唯其
の一部を以つて博士の銅製胸像を美術家佐野昭氏に作製せしめ、これを博士に贈
ることとなり、其の報告は委員總代より資金の收支計算書とともに、翌大正十一年
二月を以つて大要左記の如く公にせられた。

工學博士田邊朔郎君還曆祝賀資金募集報告

拜啓貴下益々御清榮ノ段大慶至極ニ奉存候陳者豫而御賛同ヲ忝シ候田邊博士還
曆祝賀資金募集ノ儀御同情ノ結果其額金壹萬八百五拾壹圓ニ達シ候就テハ之ヲ
別紙收支計算書ノ通り處理仕リ今般其事務終了致シ候間茲ニ各種書面寫并ニ出
資者芳名録ヲ相添へ此段御報告申上候敬具。大正十一年二月田邊博士還曆祝賀
資金募集委員

田邊博士還曆祝賀資金收支計算書

收入之部

一金壹萬壹千參百貳拾六圓六拾六錢

總 收 入 高

内 譯

一金壹萬八百五拾壹圓

一金壹百七拾八圓八拾壹錢

一金貳百九拾六圓八拾五錢

支出之部

一金壹萬壹千參百貳拾六圓六拾六錢

内 譯

一金九千九百九拾六圓參拾貳錢

一金五百八拾七圓

一金五拾圓

一金貳百拾參圓參拾錢

一金壹百六圓八拾錢

一金貳百七拾參圓

一金八拾貳圓

一金拾八圓貳拾四錢

右ノ通りニ候也

出 資 者 釀 金 額

預 金 利 子

帝國五分利公債額面壹萬貳千圓
ノ利札(三月一日渡分)賣却代

總 支 出 高

京都帝國大學へ獎學資金トシテ
寄附シタル帝國五分利公債額面
壹萬貳千圓也代金
記念品田邊博士壽像壹軀

出 資 者 名 簿

印 刷 費

郵稅及振替貯金ニ關スル費用

廣 告 費

謝 金

事 務 費

大正十一年二月

取 扱 人

大 藤 高 彦

大 井 清 一

博士還曆當日(大正十年十一月二十九日)發起人總代トシテ大藤高彦大井清一兩名博士邸ヲ

訪問シ贈呈セシ目錄寫

目 録

一 鑄銅製御壽像及附屬品 壹 軀

一 祝賣人名簿 壹 帙

右贈呈候也

一 帝國五分利公債額面壹萬貳千圓也

右學術研究及其獎勵ノ資金ニ充ツベク田邊朔郎還曆記念獎學資金

トシテ京都帝國大學へ寄贈可仕候也

以 上

大正拾年拾壹月貳拾九日

右ニ對シ博士ヨリ兩名へ交附サレタル受領書寫

記

一 鑄銅製壽像及附屬品

壹 軀

一 祝賀貴名簿

壹 帙

右難有拜受仕候

一 帝國五分利公債額面壹萬貳千圓也

右ハ學術研究及其獎勵ノ基金ニ充ツベク拙者還曆記念獎學資

金トシテ京都帝國大學へ御寄贈可被下趣拜承仕候

以上厚ク御禮申上度候 頓首百拜

大正十年十一月二十九日

田 邊 朔 郎

還曆祝賀資金募集發起人總代

大 藤 高 彦 殿

大 井 清 一 殿

大正十一年一月十六日用途指定條項并ニ希望條項ヲ附シ願出タル獎學資金寄附願寫

獎學資金寄附願

一 帝國五分利公債額面壹萬貳千圓也

右ハ工學博士田邊朔郎氏ノ還曆ヲ祝賀スル爲有志者九百六名ノ釀金致候モノニ有之

茲ニ之ヲ同博士ノ素志ニ從ヒ田邊朔郎還曆記念獎學資金トシテ貴大學へ寄附仕度候條御許可相成度就而ハ該資金ハ永遠ニ保管セラレ之ヨリ生スル利子ヲ以テ學術研究及其獎勵ノ費途ニ充テラレ候様致度此段相願候也

大正十一年一月十六日

總代

大井清一[㊦]

大藤高彦[㊦]

京都帝國大學總長 荒木寅三郎殿

追テ本文寄附ノ公債ガ抽籤ニ當リ又ハ發行滿期ノ爲償還ヲ受クル場合ニ於テハ更ニ政府ニ於テ發行スル公債ヲ御購入相成候様仕度併テ相願候也

田邊朔郎還曆記念獎學資金用途指定條項

第一條 本資金ハ工學博士田邊朔郎氏ノ還曆ヲ祝賀セン爲有志者九百六名ノ贖金ニヨリ成立セルモノニシテ之ヲ田邊朔郎還曆記念獎學資金ト稱ス

第二條 本資金帝國五分利公債額面壹萬貳千圓ハ之ヲ京都帝國大學ニ寄附シテ京都帝國大學總長ノ管理ヲ請ヒ其利子ヲ以テ毎年左記ノ順序ニ依リ學術研究及其獎勵ノ費途ニ使用スルモノトス

一 土木工學科

二 土木工學以外ノ工學部諸學科

三 工學部以外ノ諸學科

第三條 利子ニシテ使用セサルモノアルトキハ次年度ニ支出シ得ルモノトス

田邊朔郎還曆記念獎學資金用途ニ關スル希望項條

利子ヲ學術研究及其獎勵ノ費用トシテ支出セントスルトキハ田邊朔郎還曆記念獎學資金用途指定條項第二條第一號及第二號ニ就テハ工學部教授會ノ議ヲ經第三號ニ就テハ評議會ノ議ヲ經テ之ヲ決セラレンコトヲ望ム

右ニ對シ大正十一年二月二日付ヲ以テ京都帝國大學總長ヨリ受領セシ挨拶狀寫

拜啓

時下益御清祥奉賀候陳ハ一月十六日付ヲ以テ田邊朔郎氏還曆記念獎學資金トシテ五分利公債證書額面壹貳萬千圓也條件ヲ付シ寄附御申出相成正ニ承諾仕候右ハ學術研究及獎勵上多大ノ便益ヲ得ベク御厚志ノ段深謝ノ至ニ存候茲ニ御挨拶申述度如斯御座候
敬具

大正十一年二月二日

總代

京都帝國大學總長 荒木寅三郎

大藤高彦殿

大井清一殿

出資者芳名錄

ア之部

阿川重郎殿

阿部一郎殿

阿部惠三郎殿

阿部美樹志殿

足立貞嘉殿

足立文太郎殿

足立元二郎殿

安藝杏一殿

安久津成雅殿

安喰長三郎殿

安達辰次郎殿

安倍仲雄殿

安藤進一殿

安藤坦殿

青木朝太郎殿

青木勇殿

青木治助殿

青木重三殿

青木美一郎殿

青木善馬殿

青崎秀雄殿

青柳榮司殿

青山咸脩殿

青山與一殿

青山祿郎殿

赤司貫一殿

赤松三郎殿

秋間玖麿殿

秋元繁松殿

秋元重保殿

彭城嘉津馬殿

淺野應輔殿

淺見釗太郎殿

淺見東三殿

淺見洋殿

朝比奈林之助殿

穴澤藤作殿

天谷千松殿

網谷安次郎殿

雨森民雄殿

新井穆殿

荒井綠殿

荒木源次殿

荒木三郎殿

荒木寅三郎殿

荒木虎象殿

荒堀三郎殿

有賀定吉殿

有光壬辰殿

栗野定次郎殿

イ之部

井口在屋殿

井阪勝三殿

井出健六殿

井上伊次殿

井上角五郎殿

井上禧之助殿

井上匡四郎殿

井上幸一殿

井上隆根殿

井上辰太郎殿

井上親雄殿

井上昇殿

井上秀二殿

伊丹吉次郎殿

伊津野憲亮殿	伊東忠太殿	伊藤壽郎殿	伊藤誠吉殿	伊藤常夫殿
伊藤隼三殿	猪子止戈之助殿	飯島馨之助殿	飯田新七殿	飯田正殿
飯田英介殿	飯田正熊殿	飯山外治殿	生駒勇殿	生垣賢造殿
池田岩治殿	池田賢太郎殿	池田季苗殿	池田晋殿	池田信殿
池田圓男殿	石井篤郎殿	石川綾治殿	石川日出鶴丸殿	石黑五十二殿
石澤寬志殿	石澤堅夫殿	石田收殿	石田美喜藏殿	石野又吉殿
磯谷熊之助殿	一柳主稅殿	市川清殿	市川誠次殿	市村忠藏殿
和泉宗松殿	稻垣甚殿	稻垣友枝殿	稻垣兵太郎殿	乾慶藏殿
今井卯作殿	今井好平殿	今泉嘉一郎殿	今泉安之助殿	今村幸男殿
今村信吉殿	岩城信太郎殿	岩口多喜次郎殿	岩倉康殿	岩崎盾夫殿
岩澤忠恭殿	岩田五郎殿	岩田成實殿	岩垂邦彦殿	岩波三男殿
岩淵恕殿	巖瀬庄七殿	宇木幸吉殿	鷓飼賢一殿	鷓尾謹親殿
ウ之部	宇治川電氣株式會社殿	宇木幸吉殿	鷓飼賢一殿	鷓尾謹親殿
上田武男殿	上田辰三殿	上田寧殿	上田柳一殿	上野有芳殿
上野節夫殿	上山武熊殿	植木捨次郎殿	植木平之允殿	植原勇殿
植村澄三郎殿	植村俊平殿	植村富五郎殿	浮洲實殿	白井清彦殿

内田 黍郎殿 内田 徳郎殿 内海 正治殿 海野 力太郎殿 梅田 清次殿

梅野 實殿 漆畑 彌三郎殿

工 之 部 江川 光雄殿 江連 俊彦殿 遠藤 金市殿 遠藤 善十郎殿

遠藤 藤吉殿 遠藤 正巳殿

才 之 部 小川 梅三郎殿 小川 織三殿 小川 郷太郎殿 小川 琢治殿

小川 東吾殿 小川 睦之輔殿 小倉 公平殿 小澤 隆一殿 小田 靜男殿

小田 延景殿 小田 林殿 小田川 達朗殿 小田川 全之殿 小野 鑑正殿

小野 喜六殿 小野 基樹殿 小原 益知殿 尾形 銀之助殿 尾形 次郎殿

愛宕 鋭太郎殿 織田 萬殿 大井 清一殿 大井 上前雄殿 大岩 弘平殿

大岡 大三殿 大河内 甲一殿 大木 外次郎殿 大倉 喜三郎殿 大倉 兼馬殿

大幸 勇吉殿 大澤 準一郎殿 大澤 徳太郎殿 大島 六七男殿 大杉 齡次殿

大瀧 新之助殿 大瀧 鼎四郎殿 大竹 虎雄殿 大塚 英太郎殿 大塚 要殿

大坪 一郎殿 大西 進殿 大西 正信殿 大野 正殿 大野 廣告殿

大橋 厚三郎殿 大橋 新太郎殿 大原 午之助殿 大原 孫三郎殿 大藤 高彦殿

大村 鎚太郎殿 大森 貫一殿 大森 鍾一殿 大森 房吉殿 太田 辛一殿

太田 豊造殿 太田 光瀨殿 岡 胤 信殿 岡 田 竹五郎殿 岡 田 馨殿

河合十太郎殿	川村龍三郎殿	川島元次郎殿	川上浩二郎殿	神門久太郎殿	金山清行殿	門野重九郎殿	片山貞松殿	風間八左衛門殿	笠井愛次郎殿	加藤與之吉殿	力之部	奥村長作殿	奥澤耕造殿	岡本桂次郎殿	岡田實殿
河上肇殿	川村鉦次郎殿	川田豐吉殿	川上留吉殿	神戸正雄殿	樺島一殿	金子登殿	片山吉則殿	梶山由郎殿	笠井眞三殿	加藤木重教殿	加賀種二殿	奥村安太郎殿	奥平清貞殿	岡本 赴殿	岡村信三郎殿
河上秀治殿	河合毅一殿	川端治吉殿	川勝一元殿	神谷秀吉殿	樺島益三殿	金太仁作殿	勝又愛治郎殿	楫取三郎殿	笠原乙彌殿	加茂熊二殿	加門桂太郎殿	長田武治殿	奥中喜代一殿	岡本梁松殿	岡村 司殿
河喜多能達殿	河合浩藏殿	川部孫四郎殿	川口虎雄殿	神代雄三殿	上倉俊殿	金森鐵太郎殿	勝又 傳殿	片岡安殿	笠原壽治郎殿	何壽祥殿	加藤準一殿	奥村省三殿	奥村省三殿	沖塩政次殿	岡村利重殿
河崎外次郎殿	河合治八郎殿	川村多實二殿	川越篤殿	龜井重齋殿	上山經亮殿	金森誠之殿	桂川輝長殿	片村龜次郎殿	笠原由太夫殿	狩野直喜殿	加藤信義殿	奥村 猛殿	奥津幸雄殿	岡本 一 郎殿	岡本 一 郎殿

河崎兵吉郎殿 河澄 正直殿 河田 嗣郎殿 河西三九郎殿 河野 規道殿

河野 繁一殿 河野 通敏殿 河原 直文殿 木村 實一郎殿 木村 憲七郎殿

キ之部 木原 英一殿 木村 榮吉殿 木村 實一郎殿 木村 憲七郎殿

木村 正路殿 木村富治郎殿 木村 雄司殿 喜多 源逸殿 菊池 恭三殿

岸 喜 鑑殿 岸 敬二郎殿 岸本 董治殿 北川幸三郎殿 北澤 淳夫殿

北島 四郎殿 北島 貞顯殿 北村左太郎殿 君島 八郎殿 清田 知本殿

京都電燈株式會社殿

ク之部 工東 三郎殿 工藤會一郎殿 久保彌太郎殿 日下部辨二郎殿

楠 宗 道殿 國澤新兵衛殿 倉田 立二殿 倉塚 良夫殿 藏重 哲三殿

栗原 唯喜殿 黒 岩 隆殿 黒 田 豊殿 桑原 隆藏殿

ケ之部 毛戸 勝元殿 京阪電鐵株式會社殿 敬禮寺信三殿 小杉 轍三郎殿

コ之部 小泉 彌作殿 小阪 拓次郎殿 小柴 保人殿 小宮 益三殿

小平 保藏殿 小西得太郎殿 小林 彦次殿 小堀 十龜殿 小宮 益三殿

小村 捨楠殿 古西爲之助殿 五島 主稅殿 後藤傳五郎殿 甲賀 宜政殿

河野 資基殿 河野 天瑞殿 洪 讓殿 越野鉄次郎殿 駒井 久吉殿

駒崎 熊次殿 近 新三郎殿 近 藤 較殿 近藤仙太郎殿 近藤竹次郎殿

近藤虎五郎殿	近藤 博夫殿	近藤 基樹殿	近藤 泰夫殿	近藤 安吉殿
權平梯三郎殿				
サ之部	佐々木計次郎殿	佐々木惣一殿	佐々木彌太郎殿	佐々木勇太郎殿
佐々木和策殿	佐藤五次郎殿	佐藤九十九殿	佐藤 昌介殿	佐藤長太郎殿
佐藤 好殿	佐野 昭殿	佐野藤次郎殿	齋藤 固殿	齋藤定四郎殿
齋藤 精一殿	齋藤 晴五殿	齋藤 大吉殿	齋藤 恒三殿	竿田 秀靜殿
阪田 貞明殿	阪谷 芳郎殿	坂井 義任殿	坂岡末太郎殿	坂上 徹殿
坂口 昂殿	坂口 榮禎殿	坂田 九郎殿	坂田 治人殿	坂本 家則殿
酒井 勇殿	酒井右馬二郎殿	境田 賢吉殿	榊 亮三郎殿	榊原 彙藏殿
櫻セメント株式會社殿	櫻井 省三殿	櫻 羽 薫殿	櫻山 壯次殿	眞田 秀吉殿
山東 功殿	山東 昶一殿	山東 兵藏殿	澤井 準一殿	
シ之部	四宮傳左衛門殿	志賀 僑介殿	志賀 重昂殿	志賀 靖殿
志岐信太郎殿	志 田 順殿	志筑岩一郎殿	清水 一德殿	清水 賢雄殿
清水 規明殿	清水 義一殿	清水 釘吉殿	清水 幸次殿	清水 三藏殿
清水槌太郎殿	清 水 殿	清水本之助殿	斯波忠三郎殿	鹽澤龍次郎殿
塩谷 五郎殿	宍戸 一 殿	後川 文藏殿	靜間 六郎殿	篠原朋一郎殿

柴田 睦作殿 島 洋殿 島 安次郎殿 島 蘭順次郎殿 島 津製作所殿

新城 新藏殿 下間 仲都殿 下村 忠兵衛殿 下山 武夫殿 正路倫之助殿

松風 嘉定殿 白石 誠夫殿 陶山直次郎殿 菅原 恒覽殿 杉浦宗三郎殿

又 之 部 陶山富太郎殿 杉谷 安一殿 杉野 茂吉殿 杉村 博通殿

杉谷 幸藏殿 杉谷 茂殿 杉谷 安一殿 鈴木 軍藏殿 鈴木 善之助殿

杉本 一殿 鈴木 一殿 鈴木 義一殿 鈴木 軍藏殿 鈴木 善之助殿

鈴木 鑿次郎殿 住田 秀殿 關谷 新造殿 關谷 正慶殿 錢高作太郎殿

セ 之 部 關野 貞殿 關谷 新造殿 關谷 正慶殿 錢高作太郎殿

千賀鶴太郎殿 千田 正重殿 仙石 亮殿 田澤 實入殿 田島 錦治殿

ソ 之 部 會禰 達藏殿 會山 親民殿 田澤 實入殿 田島 錦治殿

夕 之 部 田井 九一殿 田川正二郎殿 田澤 實入殿 田島 錦治殿

田中 義一殿 田中源太郎殿 田中 豐輔殿 田中 寅男殿 田中 正夫殿

田邊 良忠殿 田淵 精一殿 大藤 直哉殿 高井壽二郎殿 高石 庫治殿

高尾 繁造殿 高木 虎尾殿 高口重太郎殿 高島幸之祐殿 高須 哲殿

高瀬 深策殿 高田 景殿 高田元治郎殿 高津寄 章殿 高辻奈良造殿

高西 敬義殿 高根 義入殿 高野 代七殿 高橋 逸夫殿 高橋 三省殿

高橋邦太郎殿	高橋甚也殿	高橋末治郎殿	高橋誠一殿	高橋辰次郎殿
高橋寅三殿	高橋秀國殿	高松梅治殿	鷹田元次郎殿	鷹取篤三郎殿
財部靜治殿	瀧 鎬造殿	瀧淵實烈殿	瀧山 與殿	竹内季一殿
竹内常八殿	竹内理一殿	竹原正寅殿	武居高四郎殿	武田五一殿
武智正次郎殿	立原 任殿	辰馬鎌藏殿	谷 堅殿	谷幸三郎殿
玉木辨太郎殿	玉城嘉十郎殿	玉橋市三殿	玉付勇助殿	團琢 磨殿
子 之 部	近重 眞澄殿	長島清松殿	張 惟和殿	張 令紀殿
ツ 之 部	津川立之助殿	津田 豐殿	津田安治郎殿	都々木春美殿
塚本一郎殿	塚本精太郎殿	塚本 靖殿	辻 寛治殿	土屋員安殿
坪井豐彦殿	妻木二郎殿			
子 之 部	調所武光殿	寺尾 梯治殿	寺田三男殿	寺田省歸殿
寺野精一殿	照屋 宏殿			
ト 之 部	土居 幸作殿	戸川嘉吉殿	戸倉傳八郎殿	戸田正三殿
東條玉太郎殿	東福寺正雄殿	同 文 館殿	德 宜鼎殿	德見常雄殿
利根川守三郎殿	富田惠四郎殿	富田哲造殿	富田保一郎殿	富所駿男殿
富永倉平殿	友成 仲殿	朝永正三殿	鳥瀉隆三殿	

十之部

名倉兼三郎殿

那波光雄殿

奈良崎平助殿

内藤朝義殿

中井陸雄殿

中上友三郎殿

中川吉造殿

中川惠郎殿

中川知一殿

中川政次郎殿

中桐春太郎殿

中里眞清殿

中澤岩太殿

中澤良夫殿

中島銳治殿

中島於菟太殿

中島玉吉殿

中島學殿

中島洋吉殿

中田爲治郎殿

中西讓平殿

中原岩三郎殿

中原淳藏殿

中原達弘殿

中原貞三郎殿

中村宇太郎殿

中村啓二郎殿

中村元殿

中村謙介殿

中村貞輔殿

中村滿輔殿

中山千秋殿

中山秀三郎殿

仲井俊雄殿

永井章吾殿

永井專三殿

水井昌作殿

永井環殿

永井松次郎殿

永島富三郎殿

永田兵三郎殿

永田與吉殿

永屋昌雄殿

長尾半平殿

長澤俊雄殿

長濱時雄殿

長屋直人殿

並川熊次郎殿

南部常次郎殿

難波幸一殿

成瀬喬殿

成本惟精殿

二之部

仁保龜松殿

仁禮四郎助殿

日本電力株式會社殿

新家孝正殿

新元鹿之助殿

西時靖殿

西信忠殿

西池氏文殿

西内貞吉殿

西尾虎太郎殿

西川總一殿

西川虎吉殿

西川博殿

西崎傳一郎殿

西田精殿

西田辰三郎殿

西田博太郎殿

西原利夫殿

西松亥吉殿

西光正雄殿

西村二滿殿

又之部 沼田尙德殿 温井亮吉殿

子之部 根岸 豐殿

ノ之部 野崎泰一郎殿 野澤房敬殿 野田六次殿 野滿隆治殿

野村一郎殿 野村武治郎殿 野村龍太郎殿 野村眞道殿 野山芳五郎殿

納富磐一殿

ハ之部 羽室龜太郎殿 羽室庸之助殿 長谷川正五殿 長谷川直藏殿

長谷川裕殿 馬場齊吉殿 馬場信輝殿 服部鹿次郎殿 服部俊一殿

服部保殿 花房周太郎殿 花輪慎一殿 濱尾新殿 濱田耕作殿

濱名惠殿 濱野彌四郎殿 濱部源次郎殿 伴直之助殿 早川千吉郎殿

速水太郎殿 林有一殿 林桂一殿 林茂久殿 林禎太郎殿

原勝郎殿 原邦造殿 原全路殿 原靜雄殿 原口忠次郎殿

原澤豐吉殿 原田春三殿 原田碧殿 原田精一殿 廣田理太郎殿

七之部 日比忠彥殿 比企忠殿 比企野廣治殿 比田孝一殿

平井毓太郎殿 平井力殿 平井政孝殿 平田全祐殿 平野正雄殿

廣井勇殿 廣澤範敏殿 廣島電氣株式會社殿 廣田精一殿 廣田理太郎殿

フ之部 不破尅殿 不破博殿 傳 銳殿 深井庄吉殿

福井 一治殿 福井 薰殿 福井正太郎殿 福島 郁三殿 福田十太郎殿

福田 惣次殿 福田馬之助殿 福田 稔殿 福留 並喜殿 二見鏡三郎殿

藤井 厚二殿 藤井彌太郎殿 藤崎 三郎殿 藤澤 清殿 藤島 範平殿

藤代 禎輔殿 藤田藤太郎殿 藤浪 鑑殿 藤根 壽吉殿 藤林 徳松殿

藤村清太郎殿 藤山 常一殿 舟塚芳次郎殿 船越 欽哉殿 吉市 公威殿

古川阪次郎殿 古谷 晋殿

へ 之 部 日置 久次殿 別所 史郎殿

木 之 部 彭 道 中殿 法 亢 盛良殿 星 埜 章殿 細川英二郎殿

細田登免治郎殿 細田 信道殿 本多憲千代殿 堀 覺太郎殿 堀 信 一殿

堀 親 道殿 堀 眞 澄殿 堀江 勝已殿 堀口勉一郎殿

マ 之 部 眞野愛三郎殿 眞野 文二殿 米谷 信義殿 前川 貫一殿

前田 鼎殿 前田 廣治殿 前野政之助殿 牧口 末吉殿 牧田 環殿

牧野 千里殿 牧山熊二郎殿 増見 修治殿 松井 元興殿 松浦角太郎殿

松浦不二夫殿 松尾 徹殿 松島寛三郎殿 松田 一雄殿 松田貞治郎殿

松永 工殿 松永 博殿 松永 六二殿 松長規一郎殿 松波 秀 一殿

松久 正次殿 松丸 富吉殿 松村 種雪殿 松村 鶴造殿 松本岩太郎殿

松本 德三殿	松本 虎太殿	松本 均殿	松本文三郎殿	松本芳三郎殿
的場 中殿	丸善株式會社殿	丸田 覺殿	丸山 悅三殿	丸山 忠作殿
丸山 芳樹殿				
ミ之部	三井 助作殿	三池 貞一郎殿	三浦 周行殿	三浦 鍋太郎殿
三浦 矩明殿	三上 房吉殿	三根 奇能夫殿	三根 正亮殿	三宅 次郎殿
三輪 經治殿	三輪 周藏殿	溝日 親種殿	水木 常信殿	水野 五郎殿
水野 敏之丞殿	水野 廣之進殿	水山 祐德殿	南鷹 次郎殿	峰村 國吉殿
宮内 義則殿	宮川 清殿	宮田 常之丞殿	宮野 牧太殿	
ム之部	武笠 清太郎殿	武藤 吉治殿	宗像 十郎殿	村 幸長殿
村上 小源太殿	村上 萬助殿	村上 元紀殿	村田 道太郎殿	村山 喜一郎殿
メ之部	名井 九介殿			
モ之部	毛利 忠三殿	持田 軍十郎殿	本野 亨殿	本山 彦一殿
森 慶三郎殿	森 早苗殿	森 春吉殿	森 彦三殿	森 彦六殿
森 岡正二殿	森 垣龜一郎殿	森 川竹松殿	森 川藤次殿	森 島庫太殿
森 田一雄殿	森 本義言殿	森 博殿		
ヤ之部	八島 明殿	安田 靖一殿	安田 禎之殿	柳瀬 正哉殿

柳田癸巳夫殿	山川義太郎殿	山口銳之助殿	山口修一殿	山口準之助殿
山口秀造殿	川崎四郎殿	山崎仲次殿	山崎德義殿	山鹿誠之助殿
山下宗利殿	山田龜治殿	山田邦彦殿	山田三郎殿	山田忠三殿
山田直矢殿	山田復一殿	山田正隆殿	山田元殿	山路魁太郎殿
山中小六殿	山中新太郎殿	山中良樹殿	山根槌藏殿	山本亥太郎殿
山本梅彌殿	山本開藏殿	山本潔殿	山本幸兒殿	山本敏殿
山本直三郎殿	山本信要殿	山本美越乃殿		
ユ之部	湯本三郎殿			
ヨ之部	横井實郎殿	横河民輔殿	横堀治三郎殿	吉岡計之助殿
吉岡藤作殿	吉川龜次郎殿	吉岡彌藏殿	吉川留喜殿	吉田卯三郎殿
吉田耕一殿	吉田光夫殿	吉町太郎一殿	吉見鎮之助殿	吉見勝殿
吉村長策殿	米倉清族殿	米元晋一殿		
リ之部	利光平夫殿	梁強殿		
レ之部	簾藤三平殿			
ワ之部	和歌山水力電氣株式會社殿	和田堯春殿	和田健三殿	和田健雄殿
和辻春次殿	脇屋輯二殿	渡部英太郎殿	渡邊一良殿	渡邊嘉一殿

渡邊俊雄殿 渡邊直也殿 渡邊兵四郎殿 渡邊美道殿 遊邊六藏殿 邊渡讓殿

京都ホテルに於ける壽宴

右の如く博士の還暦祝賀資金は、其の殆んど全部を大學に寄附し、博士が十一月二十九日の還暦當日は、總代委員の手より銅製鑄像は、博士に贈られ、而して此の日午後六時より、此の舉に關係ある人々は京都ホテルに相會して、博士のために眞心罩めし賀筵を張つた。席上、助教授平野正雄氏の挨拶にいふ

最初何か紀念品をお贈りしたいと思つてお伺ひしたんですが清廉の先生は何うしてもお受け下さいません、併し集つた金の總べてを寄附して仕舞ふのでは餘り物足りなく思はれるので胸像だけを強いて享けて戴きました。

寡慾澹白なる博士の面目見るべし矣

と。寡慾澹白を以つて六十年を一貫せる我が博士の面目即ち見るべし矣。斯くて一同博士の壽を祝して樂しく乾杯したのであるが、此の夕の集りこそ博士を主賓とするに眞にふさはしき清らかな興會であつたのである。

二、一大紀功碑建設

京都府建設の一大紀功碑

博士が還暦を機とし京都府にては其の偉業を後世に傳ふべく、京都出町劍先に地を相して博士の紀功碑を建設するに決定した、出町劍先は鴨川と高野川との合流

するところ、で電車線に接近した公園豫定地である。

京都府の建設であるから其の工事施工の上に鄭重を極めた。即ち事實の正確と選文の推敲に尠なからざる時日を費し、筆者山本竟山氏は字書の照考に多大の盡力をなし、碑材の選擇に至るまで萬遺憾なからむことを期したるため大正十二年の七月十九日に至つて漸く落成し、これが除幕式を舉行するを得たのであつた。巍々たる此の大紀功碑の秀麗明媚なる洛北の山川を背景として屹立すると同時に碑面刻するところの博士が功業は兒童走卒にも千載不磨の教訓を垂れて、世道人心に資益するところ如何に大なるべきぞ。

除幕式

除幕式の次第は次の如くである。

白日に燦として紀功碑の除幕——田邊氏の挨拶

既報出町劔先に建設された工學博士田邊朔郎氏の紀功碑除幕式は十九日午前十時三十分から舉行、博士は夫人及び令嬢を伴うて出席、官公吏學者、實業家、府市會議員等の會衆約二百名着席の終るや、博士令嬢こし子さんは靜かに進み、織手をのべて引綱を颯々引く。幕は落ちて、疏水開鑿の功を永遠に記念する地上十五尺の碑石は輝く。夏の光の中に巍然たる姿を現はし、一しぎり潮の如き拍手が湧く。かくて建林下鴨神社彌宜の嚴かな大祓式が行はれ、主宰

者池松知事の式辭來賓馬淵市長荒木京大總長及び當年博士を援けて共に工事に従うた山田忠三氏等の祝辭があつて後、田邊博士は

自分の仕事か幾分世の中の役に立つに至つたのは全く仕事に從事された方又は有力な關係者御一同の御盡瘁にあるこゝで私は僅かに其の一部分を勤めたに過ぎませんそれで此の碑の下に石の唐櫃を作つて其の中へこれ等の方々の御姓名は勿論關係書類新聞記事等を纏めて入れ、永久に埋め保存するこゝにいたしました

こ謙遜な挨拶を述べた、式後碑前に設けた天幕張の中で祝宴を開き席上知事、市長のテーブルスピーチがあつて博士のために乾盃し正午散會した。

大正十二年七月廿日大阪朝日新聞所掲

池松京都府知事の式辭と馬淵京都市長の祝辭は左の通りであつた

式辭

從三位勳二等工學博士田邊朔郎君紀功碑成り茲に本日をとして除幕の式を舉行するに會す洵に予の欣幸とする所なり。顧ふに琵琶湖疏水の事たる其の工を起す實に三十八年前に在り。當時我國に於て空前の大工事と稱せられ萬人目して至難みなし齊しく其の成功を危める所なり。君選ばれて經營の大任に當り拮据精勵百方畫策して遂に克く之を完成し偉業人をして驚歎せしめ令譽内外に馳す。爾來君は屢我が京都府市の土木事業に干與し貢獻す

京都府知事
の式辭

る所頗る多し其の功績の概要は刻して碑文に詳なり。京都の殷盛を觀て此の碑に對する者誰か君の偉功を仰がざるあらんや。

京洛の峯巒長へに秀で、疏水の萬波遠く碧なり以て君を壽す庶幾くば邦家の爲め加餐自愛せられんことを一言以て式辭さす。

大正十二年七月十九日

京都府知事正四位勳三等 池 松 時 和

祝 辭

京都市長
の祝辭

京都市が四十年以前に於て琵琶湖の天恵を利用し運河を開通して舟楫の便を興し、水力に由る電氣を起して工産の原動力とし更に灌漑の利を得るために疏水開鑿を企劃して是を實現し得たことは、世界に誇るに足る所の文化的施設であると言ふを憚りませぬ。

百餘年前よりの懸案であつた疏水開通工事が時の府知事北垣國道氏によつて主唱され、當時年纔に二十三歳の工學士田邊朔郎氏によつて計劃された時、土木の技術猶未だ進まず工事が世界的の大事業であることを知る世人は竊に其成否如何を危懼したのでありました。しかしながら氏を信ずることの深かつた北垣知事、己を識ることの強かつた田邊工學士此兩者の固い意志と熱誠とは克く此事業をして今日あらしめたのであります。

十八年六月工を起してより實に五年。其間の氏の焦心勞思、苦慮劃策は全市民の今日は勿論

將來永く感謝すべき所であります。

其の後氏はその卓拔なる學識と偉大なる經驗とによる斯界の權威として大學に教鞭を執らるゝ傍第一疏水の延長たる運河工事を督し、四十一年には更に第二疏水の開通に力を盡されたのであります。斯くして天與の水原は轉して本市無盡の富源となり車駕の東幸と共に一時閑寂に傾かんごせし我が京都市に電車走り、電燈輝き、上水の利を得動力の便興りて、今や往時を凌ぐ殷盛を來しつゝあるもの一に田邊工學博士偉績の賜であります。本日鴨川の水清きところ此の偉業を語る紀功碑竣成の除幕式に臨み當時を追想して洵に感激に堪へませぬ。

こゝに同博士の功を稱へて祝辭に代へたいと存ます。

大正十二年七月十九日

京都市長 馬淵銳太郎

碑の表面
裏面

碑は表面に工學博士田邊朔郎君紀功碑の十二大字を縦線に題し、裏面に紀功碑の記壹千三百有餘字を以つて博士の功績を詳記したるものである。なほ雜誌工政の大正十二年八月號に掲ぐるごころの紀功碑建設の次第を左に掲げるであらう。

工學博士田邊朔郎君紀功碑建設

會員 近 新三郎

工學界の權威者工學博士田邊朔郎君は多年我國工學界の爲めに多大の貢獻をせられた事は今更云ふ迄も無いが、特に琵琶湖疏水工事の大事に當り、明治十八年當時の我國土木界に於て一も外人の手を藉らずに、延長廿町餘の長等山隧道を開鑿し、高さ百餘尺の「インクライン」を設け、世界最大の稱ありし蹴上水力發電所を創設せられ、我國土木界をして非常な自信の念を起さしめられたるのみならず、我國水力電氣の發達上に偉大なる促進の動機を與へられたるは眞に文明の進展上に顯著なる貢獻で、此偉大なる功績は實に國家として是に酬ふるの價值あるものと思ふ、然るに事務家の功績を認むるに急にして技術家の功績を認むるに頗る吝なりし我國是迄の弊風は、博士の偉功を忘れたる如く、今日迄約三十八年を過ぎ來つたのであるが、世運の進展は大正十年博士の還曆を期し、博士の爲めに京都府自ら紀功碑を建つる事を計畫し、其の功績を永遠に傳ふる事と成つたのは、博士の偉功に對して素より當然ではあるが、世人が技術家の働きに對する諒解の一端の顯れとして、邦家の爲めに欣懷に堪へざる處である。

石碑は地上高さ約十五尺、桿石は高さ十二尺、幅五尺、厚さ一尺、表面に「工學博士田邊朔郎君紀功碑」と刻し、裏面は次の如き「紀功碑記」を千三百七十七字刻し、是を京都市の北部なる加茂川高野川合流點附近の風光明媚なる廣場の一角に建設し、本年七月十九日盛大なる除幕式を舉行せられたのである。田邊博士の如き功勞者に對しては、其の偉績の直接恩澤を蒙る京都

府が紀功碑を建設して其の功績を永遠に記念表彰する事を以て足れりさせぬ此際國家亦博士の國家的偉功に對して酬ゆる處あらん事を切望して止まぬ次第である。(大正十二年七月二十日稿)

從三位勳二工學博士田邊朔郎君紀功碑ノ記

琵琶湖ノ水ヲ引キテ水利ヲ京都ニ興サントスルハ百餘年來屢識者ノ唱ヘシ所ナレドモ能ク起チテ之ニ當ル者ナカリキ明治二年車駕東幸シ一千年帝都ノ地日ニ衰弊セントス事天聽ニ達シ畏クモ内帑ノ金ヲ賜ヒテ産業振興ノ資ヲ佐ケラルル京都府知事北垣國道君聖旨ニ感激シ琵琶湖疏水工事ヲ斷行シ府民ヲシテ永ク皇澤ニ浴セシメント欲ス時ニ田邊朔郎君工部大學生タリ夙ニ琵琶湖疏水ノ京都ニ利アルヲ念ヒ其ノ地ヲ踏査シテ審ニ之ヲ論ゼリ大學校長大島圭介君素ヨリ君ガ才ノ用フベキヲ知リ之ヲ知事ニ薦ム知事君ノ設計ヲ聽キテ大ニ喜ビ十六年君ガ二十三歳ニシテ大學ヲ卒業スルニ及ビ此ノ大工事ヲ舉ゲテ君ニ囑セリ當時我が國土木ノ術未進マズ工事ノ稍大ナル者ハ概之ヲ外人ニ託スルヲ常トセシカバ君ノ才ヲ知ラズシテ其ノ前途ヲ危ミ此ノ舉ヲ難

ズル者尠カラズサレド知事ハ群議ヲ却ケ君ヲ信ジテ疑ハズ君亦慨然トシテ之ニ任ゼリ乃チ水路ヲ幹枝二線ニ分チ湖口三保崎ヨリ藤尾山科蹴上ヲ經テ夷川ニ至リ鴨川ニ合スル者ヲ幹線トシ專之ヲ舟運ニ便シ蹴上ヨリ若王子白川ヲ經テ堀川ニ合スル者ヲ枝線トシ之ヲ灌溉及工業ニ供スル計畫ヲ定ム斯クテ十八年六月三日ヲ以テ工ヲ起スヤ君日夜心血ヲ傾注シテ之ニ當リ要スル所ノ材料及機械ノ類或ハ遠ク外國ニ求メ或ハ自考案製作シ又部下ヲ教習指導シテ其ノ技ニ熟セシムル等百方畫策孜孜トシテ倦マズ工程愈進ミテ苦慮益加ル就中長等山隧道ハ長サ一千三百四十間國中ニ比ナク蹴上ヨリ南禪寺前ニ至ル傾斜鐵道ハ長サ三百二十間世界未曾有トス又南禪寺前ヨリ鴨川ニ至ル間ニハ閘門ヲ設ケ落差ヲ調節シテ舟運ニ便セリ此ノ工未半ナラザルニ米國ニ於テ始メテ水力發電所ヲ設ケタルヲ聞キ二十一年君米國ニ赴キテ之ヲ調査シ歸リテ發電所ヲ蹴上ニ創設ス是我ガ國ニ於ケル水力發電裝置ノ嚆矢ニシテ世界最大ト稱セラル經營ノ苦心思フベシ二十三年四月功竣ル起工以來實ニ一千七百七十二日ヲ閱セリ之ヲ第一疏水トス同月九日竣功式ヲ舉行ス

天皇 皇后親臨シ優詔ヲ賜ヒテ偉功ヲ褒セラル其ノ後君ハ帝國大學教授ニ任ゼラレテ東京ニ赴

キ工學博士ヲ授ケラレ次イデ北海道廳鐵道部長ヨリ京都帝國大學教授ニ轉ジ
現ニ其ノ任ニ在リ夷川ヨリ深草ヲ經テ伏見ニ至ル運河ハ第一疏水ノ延長工事
ニシテ君ガ其ノ設計及監督ノ大綱ニ參與シタルハ東京在任中ノ事ニ屬ス四十
一年京都市再君ニ囑シテ第二疏水及上水道街路改修ノ三大工事ヲ行フ乃チ第
一疏水ニ沿ヒテ隧道ヲ設ケ水ヲ蹴上ニ會セシメ之ニ依リテ發電力ヲ増大シ改
修街路上ニ電車ヲ運轉シ上水道ノ設備ヲ完成シ且蹴上以下ノ既設水路ヲ擴張
シ大ニ舟運ノ便ヲ加フルニ至レリ顧フニ琵琶湖疏水ハ我が國空前ノ大工事ニ
シテ其ノ施設ハ東西諸國ニ率先セリ學識該博德望衆ヲ率キ至誠堅忍經營宜シ
キヲ得ルコト君ガ如クナルニ非ザルヨリハ焉ゾ此ノ功ヲ收メン英米諸國之ヲ
聞キ君ニ功碑ヲ贈リテ其ノ功ヲ稱セリ君ガ京都府ニ於ケル功績ハ之ニ止ラズ
京都ヨリ宮津ニ至ル道路ヲ改修シ京都舞鶴間ノ鐵道線路ヲ選定セルガ如キ皆
其ノ宜シキヲ得ザルハナシ嗚呼偉ナルカナ今ヤ京都ノ殷盛ハ昔日ニ凌駕シ疏
水ノ偉績ハ永ク萬人ノ頼ル所タリ疏水ノ鴨川ニ注グ處橋ヲ架シテ田邊橋ト曰
フハ未君ノ名ヲ著スニ足ラズ大正十年君壽還曆ニ當ル乃チ碑ヲ建テ事ヲ記シ
テ其ノ功ヲ百世ニ傳フ實ニ我が府民ノ志ナリ

大正十二年二月

京都府知事正四位勳三等 池松時和

(1)官吏は無事に勤務してさへ居れば定期に叙位叙勳がある。だから其の期限に到達した頃を見計つて所屬長官に催促がましく當つておき、さうしてキチンキチンと昇位昇勳せらるゝ官吏は少くない。博士は月給やら位勳の昇等に關して一向頓著なかつた。夫がために博士はあれだけの顯著なる功績があるに關はらず定期の叙位勳より外に何もなく然も其の定期叙勳さへも官吏として同様な位置に勤務して居る他の人達よりも遅かつたといふのが論より證據であらう。博士は大正十三年の御慶事に際し勳一等に叙せらるゝ大正十三年の御慶事に際し勳一等に叙せらるゝ

蒙つたことは祝すべきこととして茲に附記して置く。

三、結 語

國家盛衰の岐るゝ、
所以、
それ國は其の人あるに榮え、また其の人なきに衰ふ。史を按じて國家盛衰の岐るゝ、
、所以を知るものは、以上文久元年に始まりて大正十年に終る博士の六十年史の、
そも何に値するかを識らねばならぬ。
あゝ回顧す六十年。其の歲月の如何に博士のために尊ぶべく、將た如何に博士を

博士六十年史の終に回顧す

博士の大
氣魄大本
領

有したる此の歲月の我が帝國のために賀すべかりしよ。彼の多事なりし幕末の江戸に生れ、明治の初頭、學界に志を立て、より、一生を通じてまた寧日なく、幼稚なる日本の文明を導きて、専門學上に稀有の貢獻をなし、世界屈指の功業を完成して現在に及ぶ。誰か博士の還暦の日に際して感激するところなきを得るぞ。況んや博士の志は斷じて現狀に止るものではないのである。

博士は其の還暦祝賀に際し、門下の諸氏が贈るところの資金を盡く京都帝國大學に獎學資金として寄附せしめた。其の時の博士の言にいふ。

地球は無遠慮に廻轉します。爲したい仕事は無限にあつて然も人間の生命は有限であります。故に學問の完成は次代三代に續いて後に來る者の生命に待つのはないのであります。私の還暦祝賀のため集めて下された金を獎學資金に使用されて學問のために役立つことすれば私はそれを満足に思ひます。私にこつて一萬圓の金は尊い。併し學界のため有効に使用せらるゝになれば私の手元にあるよりも、如何に其の方が有益でありませう。

有限の生命を次代に延長し、研究の大成を期す

即ち知るべし。博士は學術の研鑽を終世の事業として、自家の全生命を之に捧ぐるのみならず、其の事業の繼承持續を後進の學徒に囑し、己が有限の生命を次代に延長して、日新又日新研究の大成を計るの外、また他を顧みるの暇なきを。而して

此の大氣魄あり此の大抱負ありて、其の事業は愈進涉し、其の研究は益向上し以つて、博士をして轉た老の到るを忘れ福壽海無量の妙諦を味讀せしめずんば止まない。斯くして博士の存在は、永久に我が學界の誇たらざるを得ないのである。

偉なる哉博士や。編者は是に於いて乎。此の六十年史の終結は、必然新らしき博士の歴史の開かるべき前提であり、従つてこのことは、日本帝國の文明の一層高所に到達すべき階段をなすものたるに外ならざることゝを録して、謹んで四方の君子の賢明なる判断を俟たむとするのである。

日本文明
の一層高
所に到達
すべき階
段

第七編 終